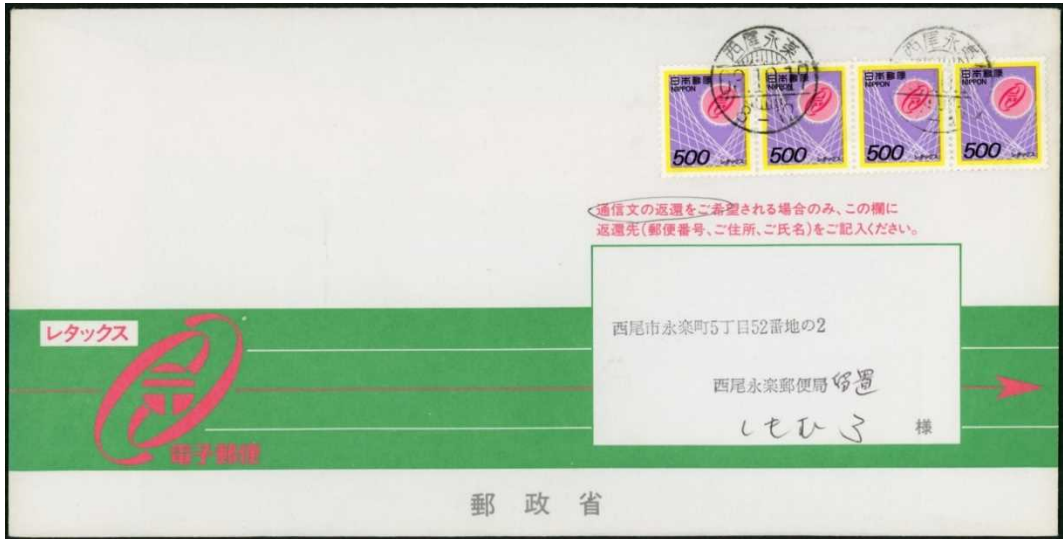


電子郵便の実遞便？

永吉 秀夫



西尾永楽 S63(1988). 10. 17

1981年に実験的に始まった電子郵便は、1984年10月1日に全国実施となり、電子郵便用の切手も発行されました。翌年7月からはポスト投函ができるようになり、識別を容易にするために黄枠つきの新デザインの手切が発行されました。通信文返却希望の場合、当初は返信用60円切手を貼って自分の住所氏名を書いておくと封筒ごと返送してもらえらるシステムでしたが(→7ページ写真)、ポスト投函できるようになったのと同時に、通信事務封筒に入れて無料返送されるようになりました。このためその後発行された第2次電子郵便切手貼り電子郵便実遞便は、初日に収集家のために返却されたものを除き、本来存在しません。

紹介品はその第2次電子郵便切手を4枚貼り、返信先(差出局留置)を記載した「実遞便」です。当時の料金は通信文1枚500円、追加1枚につき300円だったので、計6枚の送信便かと思ったのですが、封筒の中には右のような送信文つき宛名用紙が4枚封入されていました。家具屋さんが婚礼家具お買い上げのお客さん宛に送った祝レタックスですね。4枚は宛名と配達指定日のみ異なっていて、4通分をまとめて1つの封筒に入れて差出・返却してもらったものようです。上述のように本来なら1通ずつ通信事務封筒で返却されるはずですが、現場ではいろいろとイレギュラーな扱いがなされたようです。

